よめはん橋

昔、梶谷の集会場から西に行って、吉田川を渡る橋が板をおいた板橋であったころの話です。

雨がしとしと降る夜、近所の人が寝しずまったころになると、この板橋に、頭の髪を高く大きくしてかんざしをさし、袖の長い真っ赤な着物を着、帯をたいこに結んだよめはんが、川で小豆をシャリリ・シャリリと、といでいたそうです。そんなことから、この橋は「よめはん橋」と呼ばれるようになりました。

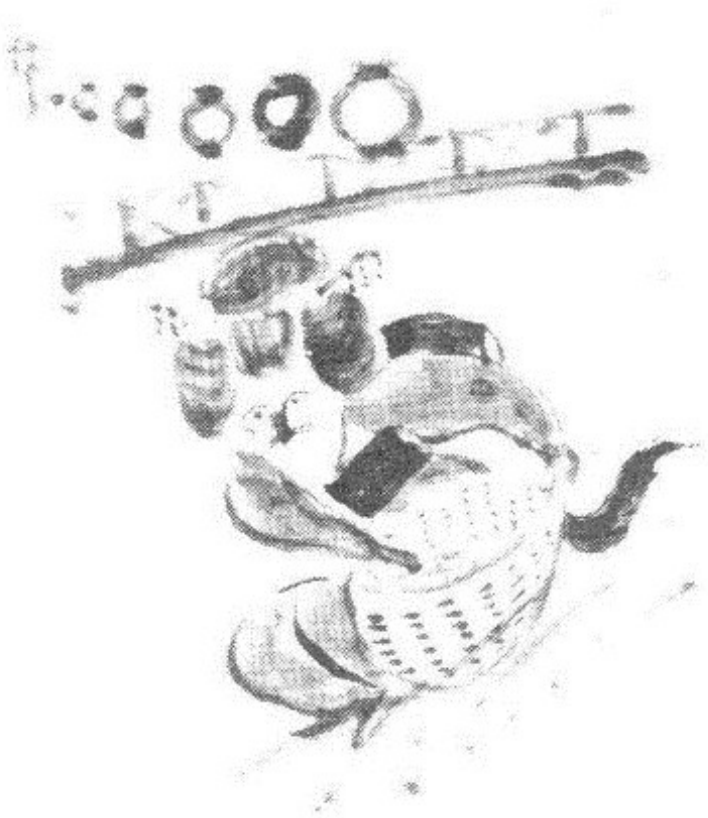
また、こんな話もあります。よめはんは、暗いのであかりにちょうちんをさげていますが一人です。よめはんはあたりに人がいないのをたしかめると、ちょうちんの明かりで西へ向いて歩きはじめます。少し行くとちょうちんの明かりが消え、よめはんも見えなくなり、雨が降るばかりです。

ところがまた、ちょうちんに明かりがついて、よめはんが西に向いて歩くのです。

「あ、よめはんが西に行く」と見ていると、明かりが消えてよめはんも消えます。そうこうすると、明かりがついて、よめはんが西に向かって歩きます。

このように、ちょうちんの明かりがついたり消えたり、嫁はんが見えたり消えたりしながら、よめはんは台山のふもとの常夜灯にたどりつきます。常夜灯の前で、よめはんはゆっくりとからだをまげて、ていねいにお参りをします。

お参りが終わると、ちょうちんの明かりが消え、よめはんも見えなくなります。後はもう、明かりもよめはんも現れてこないのです。

雨の降る晩には、きまってちょうちんをさげたよめはんが現れるので、この板橋は「よめはん橋」と呼ばれていました。

（『豊浜のむかし話』より）